

八尾上新町にデザイン研台風上陸

「おわら」ひと月後・まちづくりフォーラムと展示会

text_shiozaawa

風の盆に合わせた前回調査から約ひと月、いまや十余人を擁する巨大プロジェクトとなった八尾チームは、まちづくり提案を携えて現地へ。M1の若い力が中心となって、展示とフォーラムを成功させた。

パネル展示

今回の訪八の最大の目玉は16日に開かれた「第一回上新町まちづくりフォーラム」。4月から積み上げた調査をもとに練った、八尾上新町を元気にするための提案を、住民の方々の前で発表し、意見を伺う第一回目の中間発表。八尾メンバーは連日連夜、展示のためのパネル作成に追われ、13日の始発の富山行き飛行機にともかくにも

完成した順にパネルを抱え、かけこむM1先発隊、伊藤、筒井、塩澤。未完だった残りのパネルを託され1日遅れで後を追う平林。M14名で展示の準備に取りかかりました。

試行錯誤しながらの力づく作業、足りない物は現地調達。ちょうど展示期間中には「風の市」も開かれ、地元の方をはじめ八尾を訪れた観光客の方にも私たちの提案を見ていただけました。



完成した展示会場

左/
M1塩澤、体力任せに
揮毫す
中/
地元の方々への説明
右/
「なりひら風の市」
の賑わい



まちづくりフォーラム

平日の遅い時間帯ではありましたが、約30名という多くの住民の方々に足を運んでいただきました。西村教授のレクチャーに一同聞き入り、「住民の方々の意向次第でまちが変わっていく。」その説得力のある一筋の光に背中を押されるように、その後のワークショップ形式での議論はどのグループも白熱。ひとたび始まるやいなや会場は熱気に包まれ、議論は一向に尽きず、あっという間に時間がきてしまいました。

まだまだ私たちの提案はそこに住む住民の方々の生活にまで肉薄したのではなく、及ばない点も多くありましたが、2月の最終的な提案までにまた深めていきたいと思えます。



軽妙な西村レクチャー



フォーラムにて。熱が入れば腰が浮く



M1ボンサン、フォーラムデビュー

今、八尾が大きく動き出そうとしています。周りだけが盛り上がっていても意味はなく、住民の方々の気運を高めていくのも重要なまちづくり。八尾を愛する住民の方々の熱い想いを感じながら、それに負けないくらい体当たりで挑んでいこうと決意する八尾の夜でした。

円熟喜多方Pは秋風とともに

各景観形成WS、まちづくり塾、観光調査

M1 吉田拓

9月29日から5日間、喜多方チームは再度現地訪問を行った。内容はまちづくり塾、景観協定WS、景観資源調査の3点セット。まちづくり塾も今回で3度目になるが、塾生の高校生たちがいつもと変わらぬ元気な姿を見せてくれた。現在は課題のまとめ段階に入っており、住民の方々を集めての発表会に向け、横田塾長を中心に順調に歩みを進めている。

景観協定WSは今回が最終回。最終回の今回は、景観協定の条文及びそれに付随する用例集の案を我々が提示し、後半には観光マップ作成における素案作りを敢行した。景観協定は今回をもって終了なので、我々は一連のWSの成果と課題について話し合えなければならない。我々にとっては、住民の方々とまちづくりについて意見を交換する場として非常に有意義な経験となったが、住民側から見ると果たして十分なWSとなったのであろうか。いつも限られたメンバーしか参加しない等、課題だけが多く残ってしまった感否めない。WSに対して我々はどの程度貢献できたのだろうか。



まちづくり塾 左/獅子奮迅の横田塾長 右/発表風景



景観協定WS 左/円卓を囲む 右/発表風景

北沢スタジオオープン、芽吹く柏の葉

柏の葉だより・vol.2(秋味)

「柏の葉を拓く130の提案」

空間計画研 M1 砂川亜里沙

新領域で開講される設計演習授業は5つあり（農村・自然・人間・建築・都市）、様々な要因が複雑に絡み合っている『環境』を横断的な見方で捉え、新たな提案をしていく環境デザインのプロフェッショナルを育成する目的で開講されている。まさに新領域の真髄を体験できるプログラムである。

柏スタジオは、そのテーマを『都市周縁地域：柏の葉を拓く130の提案』と題し、半年を前期後期と分け、前期は5班でのグループワークで、対象地に65の中・長期的な予見と65の今からでも行える企画案の計130にも及ぶアイデアの提案をする。後期はその提案を実現させるための方策を本格的に設計し、最終的には横浜の『まちづくり101の提案カード』形式で出版される予定である。



まだ荒涼とした駅周辺。どのようなまちになるのか。

第1回講義に先立ち、10/7に対象地域のまち歩きが行われた。秋晴れの中、日高特任助手を先頭に、千葉県第2の十余二工業団地や明治時代に最盛期を迎えていた利根運河などを回った。参加者は、文教・国家施設、大型公園と何でもあるが印象が薄いこの地域に、興味と問題意識を共有。また、11/25の第1段階講評会から駅前に11/20オープンするアーバンデザインセンター(UDC)での授業も決定されている。自分のアイデアが2年後の柏の葉に影響をもたらし得ると期待が、一層このスタジオをオモシロくしていると言えよう。

新生・柏の北沢研究室（新領域創成科学研究科・空間研究室）の2006年度スタジオが、10月からオープン。足下の柏の葉キャンパスタウンを舞台として、他大学とも連携した巨大プロジェクトが動き出す。



ガイダンスに集った多様な面々

團氏講義

受講学生は現在20人強で都市デザイン研からはM1 塩澤、講師として野原・中島両助手、OBの三牧氏と栗原氏（どちらも野原助手の一期後輩）、空間計画研は全員が参加している。

このスタジオの特徴とは：

1. 東大の院生をはじめ、千葉大、東京理科大・千葉大・柏市職員・柏商工会議所・民間企業からも参加している。
2. 講師の方々も多岐に渡っている。信時特任教授・日高特任助手、清家助教授・社会科学系の清水助教授、宮脇助教授(千葉大・景観計画)、伊藤専任講師(理科大・都市計画)をはじめ、第1回講義は、團紀彦氏(柏の葉駅前街区マスターアーキテクト)による建築の郡構成論、都市の図と地、模型を用いたTX柏の葉キャンパス駅前UD案の解説。今後も都市工学専攻の教授を始め様々な面々が講義予定。
3. 年齢も違えば価値観や立場も違う者達が集い、同じ目線でアイデアを練り上げていく。もちろん担当教授・講師陣も一企画者として同様にグループ内でアイデアを提案していく。



本紙初公開！柏の演習室はキレイで暗い

砂川M1笑顔のプレゼン

研究室会議 発表三者と新人紹介

text_shiozawa

10月12日に、秋学期の第一回目の研究室会議が行われました。研究発表は、

- M2 鈴木智香子
「戸田市・三軒協定による街並みコントロールの現状と課題～街並みと生活スタイルの関係に着目して」
- M2 鄭一止
「歴史的町並みにおける生活景づくりとしての住民団体の活動を誘導・支援する仕組み～韓国ソウル北村地域の韓屋町と日本金沢のこまちなみ区域を事例として～」
- D3 田中暁子
「シャルル・ピュルスの都市美思想に関する研究・ブリュッセル1881-1914」

三者とも休み中の成果を存分に発揮したレジュメは充実の内容でした。

また、今回は、秋から新たに加わるメンバーとの初顔合わせ。すでに先月号でご存じのLiebs先生、10月入学のタイからの留学生Tiamsoon SIRISRISAKさん、空間デザイン研究室の松尾との交換留学生である、ポルトガルからのSidell Limaくんの自己紹介もありました。新たなメンバーを迎え、また研究室にも新たな風が。

TiamさんはChulalongkorn大学修了後、KMITL講師、協力研究員を務め、研究内容は主に、タイの文化的景観の保全に関する事。

Sidellは現在Lisbon大学建築学科の6年生、都市マネジメントを専攻。スポーツはバレーボールが得意で7年やっているそうです！

ますます国際色豊かになる当研究室。研究はもちろんのこと、日常生活の面でもお互いに交流が深まっていければいいと思います。

リーブス講義、開講

text_bannai



幼少時に描いた絵を披露

前号で紹介したリーブス教授の講義「都市設計特論 Conservation in the United States : A Cross Cultural Perspective」が10月12日に始まった。リーブス教授は、都市デザイン研究室院生を中心に40人ほどが集まった教室で、学生の反応を見ながら

講義を展開。少年時代からの来歴と業績、講義の枠組などがパワーポイントを用いて説明された。「私にとって講義とは（義務などではなく）大きな喜びだ」と語った教授は、随所にアメリカンなサービス精神を見せ、100分の講義時間を全く長く感じさせなかった。講義は毎週木曜日4限（14:45～16:25）。

編集後記

text_bannai

指折り数えて楽しみにしていたタイへの研究室旅行だが、気づけば、今日が発日だった。バンコクの都市形成史もさらっていないければ、タイ語の簡単な挨拶すらもわからない。身に染みついたやつつけを喰いながら、着替え8割・本2割の味気ない荷物を、カバンに詰める。本はアリバイ。どうせ、ぶらぶらまちを歩いて、食べて、飲んで、寝る日々、本は開くかどうかすら、怪しいというのに。それでも、楽しみ。来号は、バンコク特集です。